

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：36302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870776

研究課題名(和文) 専門職男性における進路選択構造およびキャリア形成・ライフステージ上の課題の関連

研究課題名(英文) The research of the female dominated professions with the national qualifications in Japan

研究代表者

長尾 由希子(Nagao, Yukiko)

聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・教授

研究者番号：00570821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、栄養士・看護師・保育士など、「女性が多く、複数の学校種で養成されている国家資格専門職」に注目した。これら専門職の男性は、実数では少数派であるが増加率では女性を上回っており、進路・キャリア形成の在り方や課題を分析するため、愛媛県内を中心に質問紙調査およびそれを補うインタビュー調査を実施した。助成研究期間中に行った学会報告では、専門性の認識の性別・職種での違いなどを分析した。調査実施が遅れたため、助成研究期間終了後である今年度に論稿の修正採択、学会報告、大学ホームページでの公表、関係部署へのパンフレット送付などを予定している。

研究成果の概要(英文)：This survey of the female dominated professions with the national qualifications was conducted mainly in EHIME prefecture, focusing on the males. The applicable male workers, for example a nurse, a nursery and a kindergarten teacher, are very few, but have increased at the ratio more than the females. But it is not clear what is needed in their career, how they make their career-path selections, and whether there are some differences between the both sexes. I carried out the questionnaire survey and the small size of the interview survey. During this planned period, I reported the sexual differences of the self-recognitions about their professionalism at the conference. Because my research had delayed, the research works are not enough during the period. Nevertheless the importance of this theme is clear, and I have some plans to publish one academic essay and to make some presentations in this fiscal year.

研究分野：教育社会学

キーワード：専門職 ジェンダー 進路選択 キャリア 複線型専門職

## 1. 研究開始当初の背景

女性の進学率や就労率は上昇を遂げてきたが、現在でも男女差が大きい専攻領域や職種が複数存在する。これに対して、従来は女性に対する支援を中心に対策が講じられてきた。

しかし現実には、女性が多数派を占め、男性は少数派であるような専攻、それに結びついた国家資格の職業も多く存在する（例えば看護師、栄養士、保育士、幼稚園教諭など）。

それらの男性労働者は量としては少数派であるが、増加率は女性のそれよりも高かった。例えば、国勢調査では1975年に比べて2010年には男性看護師は7倍（女性は2.8倍）、男性保育士は22.2倍に増加（女性は3倍）していた。

こうした状況を踏まえると、女性への支援のみならず、女性の多い専門的な職業（先行研究の表現では「女性優位職」）における少数派男性を支援することが重要であると思われる。少数派男性に対する支援が、性別職域分離の緩和、性別に依存しない進路選択や職業選択を可能にすることにもつながる。適性があり、その職業を望む者は、性別に関係なく能力を発揮することができるような社会の在り方が求められるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

報告者は、これらの急速に拡大した専門職、「国家資格に基づき、複数の学校種が養成に関わる職業」群を「複線型専門職」という概念で捉え、研究を行ってきた。

「複線型専門職」には、「女性優位職」が多く含まれている。このため、「女性優位職」の進路選択構造およびキャリア形成上の課題を明らかにすることで、女性の就労拡大・継続と男女での分化が継続する高等教育専攻選択の構造や課題を理解することができると考えた。

国勢調査などからは明確に増加傾向がうかがえるこれらの職種であるが、SSMやJGSSなど既存の社会学系サンプリング調査では、それ自体大規模調査であるとは言っても、専門職はごく一部になってしまい、層としては把握しづらい。

女性の多い国家資格専門職については、徐々に研究蓄積もなされてきているが、それらの多くはケーススタディや、特定の職種についてのみの調査で、他職種との比較から特性を明らかにするという観点では十分ではなかった。

複数の職種を比較可能な量的調査によって明らかにすべき課題もあるのではないかと考えた。そこで、複数職種に同一の質問紙を用いた量的調査を実施し、それら専門職の特徴と課題について、進路形成過程からキ

ャリア形成までを含めて明らかにすることを目指した。

また、当該専門職は高等教育機関で養成されるものが多く、高等教育段階での専攻選択における男女の不均衡がそのまま職業における不均衡につながりやすいため、進路形成過程もあわせて分析することは重要である。

## 3. 研究の方法

### <質問紙調査>

愛媛県内の施設等経由で対象職種（これまで女性の方が男性より多かった12職種に比較の医療職1職種およびその他を加えた14カテゴリ）の個人に調査票の配布を依頼、個人から報告者に回答票を送付してもらう郵送法を主として、質問紙調査を実施した。また、一部、雪だるま式サンプリングでの郵送法や直接手渡しによる調査も行った。最終的に、80近くの施設等の協力を得、1,000票を超える調査票を回収できた。

個人実施の調査としては多い回収数であるとはいえ、複数の職種を対象にしていることから、1,000票以上でも必ずしも十分な数ではなく、また、教育系の専門職（幼稚園教諭・保育士）の回収票、特に男性票が想定よりも少なかった。

そのため、計画を微修正し、教育系専門職に関しては他県にも調査を実施し、教育系専門職のみで別途分析を行うことができるようにした。また、他の職種についても、分析上の人数確保や協力者のプライバシー保護のため、例えば教育系、福祉系等と複数職種をまとめて分析することにした。

実査時期は2016年3月までに第一弾を実施、のち追加調査を行った。追加調査分を含めてクリーニングを行っている。

なお、教育系職男性では回収票が少なかつただけではなく、回答協力者においても自由記述が少ないという傾向がうかがえた。このこと自体、知見であると思われる。

報告者および本調査への不信感も考えられるが、他職種にはここまでの傾向は見られず、教育系職男性には孤立感や警戒感があるのではないかと想像される。調査への回答によって、労働環境等が改善されるとは考えられていないことも考えられる。業界関係者によれば、ただでさえ幼稚園や保育園は行政や大学・学生からのアンケート調査依頼が多いようであるが、昨今、特に教育系職男性への調査研究等も多くなっていると思われる。調査公害という言葉、調査結果を現場での改善につなげていく研究者の責任について、改めて認識することとなった。

### <インタビュー調査>

量的調査では十分に理解できない職業選択や進路形成プロセスを明らかにするため、インタビュー調査も実施した。

インタビュー調査は、大別して以下の二種類を実施した。

(1) 報告者のこれまでの教育経験で、また、先行研究の検討や調査票作成など本研究を進める過程で、男女の職業選択イメージや就職活動時のジェンダー関連の課題に迫る必要性を感じ、性的マイノリティ当事者を実施したもの。

(2) 専門職に実施した質問紙調査の回収結果をもとに、職種・性別などに配慮した上で自由記述の記入内容などから候補者を選定し、質問紙への回答結果を中心に掘り下げ、実施したもの。

時期については、(1) のインタビュー調査は2015年12月に、(2) は2017年3月を中心に実施した。

インタビュー数は多くはないが、インテンシブに実施でき、非常に有効な示唆を得ることができた。これらの成果は、論文や学会報告に活かす予定である。

課題としては、特に(2)は、データ解釈上の参考にするために実施したもので、もとより大量には予定していなかったが、実施できた分に関しては有意義であったことを踏まえると、もう少し多く実施できてよかったかもしれないと思われる。実施時期が報告者の都合により3月であったことから、調査対象者の中に忙しく時間がとれない方々もいたと思われる。このインタビュー実施時期が遅れてしまったこと、数が少ないことが悔やまれる。助成研究期間終了後であっても必要性を感じれば私費にて調査を実施したい。

#### 4. 研究成果

本欄では、現時点で報告済である、日本キャリア教育学会における2016年の報告内容を中心にまとめる。

##### <2016年日本キャリア教育学会報告概要>

同報告では、愛媛県で実施した第一弾データのうち、一定数が確保された職種について、分析を行った。同データの職種別特徴としては、幼稚園教諭・保育士(教育系職とする)と介護福祉士は他職種より年齢が若く、収入が少なかった(とはいえ男性の方が女性よりも多い傾向があった)。教育系職では、労働時間も長かった。

分析ではまず、先行研究をもとに検討した職種に共通する12項目の専門性の自己認識について、性別・職種別で差がないか分析した。その結果を一部、教育系職を中心にまとめる。

教育系職男性では、特に自分には「力(腕力・脚力・体力)があること」が求められているという認識が多くなっていったが、同じ教育系職女性では他の職種を含め二番目に少なくなっていた。他の職種の男女間では教育系職の男女間ほどの差は見られなかった。

このことは、教育系職では、同一の職業であっても男女で異なる役割期待を内面化している、あるいは実際に異なる役割を果たしている可能性を示す。力に関しては教育系職男性に続いて介護男性、看護男性で多くなっており、男性全般が自分に求められる専門性として認識していた。男性に力を求める声、あるいは力を求められるため辛いといった声は自由記述においても見られた。

他に、「がまん強いこと」は教育系職女性では最多であったが、教育系職男性では最小であった。「笑顔を求められている」という認識は、教育系職女性で最多、教育系職男性でも高い値であり、この要素は性別に依存しない、職種としての特質であると思われる。

また、12項目の専門性のうち、「力があること」以外の11項目を合計し、「期待される専門性得点」とした。

この得点については、男女とも平均値が高かったが、特に女性の方が高かった。期待される専門性得点に影響する要因を男女別に検討した分析では、男性では説明力は低いモデルであったが、収入が高いほど専門性得点も高くなる傾向がうかがえた。女性でも分析モデルの説明力は低かったものの、年齢、収入、教育系職で専門性得点が高くなる傾向がうかがえた。

男女とも専門性認識に対して、収入がプラスの影響を与え、収入が高いほど専門性認識も高い傾向が見られた。他方で、複数学歴の混在するこれら専門職であるが、学歴による専門性認識の差は見られなかった。

また、現在の職場で勤続する意向についても男女別で分析した。その結果、説明力の低いモデルではあったが、男性では性別に配慮した更衣室やトイレ等の施設整備がある場合にプラス、教育系職でプラスとなった(基準は介護福祉士)。

女性についてもモデルの説明力は低かったが、収入が高い場合はプラス、看護師等の職種でプラス、産休・育休が取得しやすい職場の雰囲気である場合にプラスとなった。専門職の労働者に勤続したいという意欲をもってもらうには、性別に配慮した設備や実効性のある(利用可能性を感じられる)制度が重要であることがうかがえる。

##### <今年度の報告予定など>

助成研究期間終了後であるが、同調査をもとに今年度に公表・発表を予定している研究概要は、以下の通りである。

まず修正採択となった論稿(「5. 主な発表論文等」欄参照)について、現時点で未刊であるため概要のみ説明する。

同論稿では、職業選択時や就職活動時に性別のイメージ、特に服装規範が大きな影響を及ぼすことを示唆した。

例えば女性らしい制服を採用している職種などは、それに違和感をもつ者の選択肢には入りにくい。就職活動時から男女別制服と

もいえるようなリクルート・スーツを着る慣行のある日本では、性別規範が強く、性別を問わない自由な職業選択の妨げになっている可能性もある。

また、今年度の国内学会（査読付き、現時点でエントリーのみでセレクション結果は不明）では、発表が可となった場合、女性の多い国家資格職で同業の異性に対して受容的な者（同業異性が増えてほしいと思う者）の特徴について、勤続意向と合わせて分析し報告を行う予定である。

発表を予定している国際学会（「5. 主な発表論文等」欄参照）では、これらの専門職を目指す男女の進路選択プロセスについて、学校種の違いにも注目して分析し、報告を行う予定である。

#### <課題と今後の対応>

調査実施が遅れたため、助成研究期間中には十分な成果を上げられなかった。これは報告者の責任である。

近年、研究成果を調査協力者や社会に還元する重要性は高まっている。また、この助成研究期間中にあったニュース報道等を見ても、本研究テーマの重要性はますます増していると思われる。助成研究期間の終了した今年度にいくつか公表・報告の予定があるが、それにとどまらず今後も論文の形にしていきたい。

また、社会に成果を還元するため、わかりやすいポスターやパンフレット形式にして、所属機関のホームページに掲載すること、また、愛媛県や関連団体等、適切な部署に提供することを確実に実施したい。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕（計0件）

助成研究期間中の雑誌掲載論文は0本であったが、助成研究期間中に学術雑誌に投稿していた関連論稿が2017年6月20日付で「修正採択」の通知を受けた（日本キャリア教育学会、査読付き、単著、資料論文）。

雑誌掲載時、論文の謝辞には本研究課題および課題番号を記す。今後できるだけ速やかに修正稿を提出する予定である。

### 〔学会発表〕（計1件）

①長尾由希子、「複線型専門職」における性別と「自分に期待される役割」の認識、日本キャリア教育学会第38回研究大会、2016年10月16日、札幌大谷大学（北海道）

助成研究期間終了後であるが、今後、国際学会（アジア職業教育訓練学会、2017年10月23日、ソウル大学（韓国））などで報告を

予定している。

また、国内の査読付き学会報告に個人発表を申し込み中である（日本社会学会、発表の可否の結果は現時点で不明）。報告時の謝辞には本研究課題および課題番号を記す。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長尾 由希子（NAGAO, Yukiko）

聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・教授

研究者番号：00570821